

平成25年度第1回 倫理審査委員会

平成25年5月17日

受付番号25-1

申請者	看護師	坂口 節子
課題名	保護室の看護における看護師のストレス調査 －精神科看護師の経験年数による質的分析－	
研究の概要	<p>隔離は、患者側のみならず医療側にとっても可能な限り避けたいと感じている手段であって、安全の確保のためにやむを得ず実施するというのが実際である。職務として不本意であっても引き受けなければならない状況であると、日本総合病院精神医学会でも述べられている。当院のB病棟は急性期閉鎖病棟で収容可能数 60 床のうち 10 床の保護室がある。隔離を必要とし保護室を使用する患者の多くは、入院に同意しない自傷他害の恐れのある状況で、退院要求や症状の発現から更に衝動的な行動や暴言等が頻繁にみられる。文献では、「精神科病棟の看護師は、一般科の病院の看護師に比べるとストレスは大きく、原因は一般的な看護師の職業ストレス要因に加え、精神科特有の患者とのコミュニケーションの困難さ、また患者の病状の把握や看護介入の困難さ、疾病の特徴から再発を繰り返しやすいという状態に起因するストレスがあると考えられる。」「ストレス要因として患者との関係・自分の看護力・看護のジレンマである。」と述べられており、ストレス要因は先行研究で明らかになっている。B病棟は、保護室の看護に携わる看護師の経験年数 1 年未満が 44 %を占めており、看護場面で戸惑っていることや患者対応に経験値の違いを感じた。そこで、様々なストレスを抱えている看護師に対して、どのように対応すればよいのかを知る手がかりとするために、保護室に関わる看護師のストレス調査を行い、経験年数によりどのような違いがあるのかを明らかにする。</p>	
判定	承認	

申請者	診療部長	村杉 謙次
課題名	入院期間の短縮と治療プログラムの効果的実施に関する研究	
研究の概要	<p>医療観察法は、心神喪失等の状態で殺人、放火等の重大な他害行為を行った者に対し、継続的かつ適切な医療ならびにその確保のために必要な観察及び指導を行うことによって、病状の改善及び再他害行為の防止を図り、その社会復帰を促進することを目的としている。医療観察法医療の内容に関しては、厚生労働省の示すガイドラインにその概要や目標とする入院期間(概ね 18 ヶ月)が定められているが、全国の各指定入院医療機関においては、ガイドラインの指針に沿いつつも、施設ごとに疾病教育をはじめとした様々な治療プログラムが開発され、医療が展開されている現状がある。また、入院期間に関しても、施設間での期間と認識の差が大きく、各施設の医療水準の均てん化や入院期間の短縮化を図るために、ピアレビュー研究などの先行研究もあるが、施設間の差は依然として大きい。</p> <p>このような現状に対し、各指定入院医療機関で実施されている医療に関して、治療プログラムを中心にアンケートや訪問による調査を行い、ピアレビューなどの先行研究の結果も踏まえ、治療プログラムの再編成と各治療プログラムの効果的実施方法に関しての検討を行う。また、それらの検討結果に基づき、医療観察法入院医療のクリティカルパスやひいては入院診療マニュアル案を作成し、指定入院医療機関の医療の向上や底上げを図る一助とする。</p> <p>なお、本研究は平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金研究「医療観察法対象者の円滑な社会復帰促進に関する研究」の一環として行われる。</p>	
判定	承認	

平成25年度第2回 倫理審査委員会

平成25年9月27日

受付番号25-3

申請者	薬剤科長	中山 義教
課題名	向精神薬処方における質の評価指標の開発	
研究の概要	<p>国立精神・神経医療研究センター、共同研究機関に入院している統合失調症患者を対象に、(1)抗精神病薬の投与剤数、(2)抗精神病薬の投与量、(3)抗不安薬・睡眠薬剤数、を主な評価指標として向精神薬の使用状況を調査・解析し、前年度の調査結果(平成24年10月の調査データ)と比較し向精神薬処方の改善率を見る。またその結果を各施設にフィードバックし個々の施設で現状を把握することにより向精神薬処方の最適化を推進する。</p>	
判定	承認	

受付番号25-4

申請者	作業療法士	岩野 健蔵
課題名	統合失調症患者の認知機能障害に影響を及ぼす要因に関する研究	
研究の概要	<p>近年、統合失調症の認知機能障害は、回復後の社会機能(社会的予後)に影響を及ぼすことが指摘されている。わが国の精神医療においては、入院または通院患者に対するリハビリテーション活動として作業療法やデイケアが実施されている。しかし、これらの活動が統合失調症の認知機能障害にどの程度影響を及ぼすかについては明らかではない。本研究の目的は、統合失調症の認知機能障害に影響を及ぼす要因を探索することである。統合失調症患者の認知機能障害に影響を及ぼす要因を抽出(予測)することができれば、統合失調症の認知機能障害に対する効果的なリハビリテーションプログラムを提案できる可能性がある。</p>	
判定	承認	

受付番号25-5

申請者	副院長	山崎 敏生
課題名	強度行動障害を持つ重度精神遅滞児(者)の専門的治療と移行支援に関する研究	
研究の概要	国立病院機構重症心身障害病棟における、強度行動障害を持つ重度精神遅滞児(者)の専門的治療と移行支援のガイドライン作成に必要なエビデンスの創出を目的に研究をする。	
判定	承認	

受付番号25-6

申請者	医療社会事業専門員	眞瀬垣 実加
課題名	心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の予後についての研究	
研究の概要	医療観察法入院対象者の予後を調査し、社会的特性や評価尺度との関連を検討することにより、予後に影響を与える心理社会的因子を抽出する。それらの因子を基に、現行の治療プログラム内容の見直しと開発、社会復帰調整の改善、退院後のアフターケアの改善等を行うことを通じ、わが国における司法精神医療の質の向上を目的としている。なお、本研究は平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金研究「医療観察法対象者の円滑な社会復帰促進に関する研究」の一環として行う。	
判定	承認	

平成25年度第3回 倫理審査委員会

平成25年11月22日

受付番号25-7

申請者	看護師	浅川 恵美子
課題名	精神科慢性期病棟における転倒予防体操の効果 －体操プログラムの作成と患者教育を実施して－	
研究の概要	当病棟のヒヤリハット件数の上位は、転倒・転落である。その中で過去2年間の特徴は、同じ患者が複数回転倒している件数が全体の65%を占めていた。要因は高齢化や向精神薬の影響、活動性低下による筋力低下などが考えられる。昨年より座ったまま行うストレッチ体操を取り入れたが目に見える効果が見られていない。それは、意識付けが出来ていないのではないかと考えた。そこで、転倒を繰り返す患者に、転倒予防のための体操プログラムを作成しその効果を明らかにし、また、転倒に対する患者の意識向上を図る研究を行う。	
判定	承認	

受付番号25-8

申請者	看護師	吉橋 邦泰
課題名	急性期精神疾患患者の行動制限に対する保護室行動拡大評価シートの導入 －看護師の不安に対するアンケート調査からの一考察－	
研究の概要	精神科保護室内への私物の持ち込みは等、行動制限は医師の「隔離指示書」で行っているが、細かな患者の要求に対しては、医師の指示を基本としているものの、看護師間でのカンファレンスや看護師個々の経験的な判断で対応している。そのことにより、一貫性が図れないことや苦慮することにつながり、大きなストレスになっている現状があり、自身の判断に不安を感じている。そこで、行動拡大評価シートを導入し、個別性・一貫性のある看護を提供することで、看護師の不安が軽減したかについてアンケート調査を実施し検証する。	
判定	承認	

受付番号25-9

申請者	看護師	櫻井 亜希子
課題名	精神疾患で糖尿病のある患者の健康意識へのアプローチ ～施設への退院に向けて～	
研究の概要	入院が長期化している患者には、退院や社会復帰に向けて支援しなければならない課題が多い。退院を困難にしている原因としては、セルフケアの低下や社会性の低下があげられる。今回、当病棟の糖尿病コントロール不良の患者が退院を希望しているが、家族は疎遠で一人での生活は困難なため退院することが出来ない。そのため、退院に対する患者の意欲を知り、施設への退院に向けて健康意識へのアプローチをし、患者の思いに沿った支援を行う研究を行う。	
判定	条件付承認	

平成25年度第4回 倫理審査委員会

平成26年1月28日

受付番号25-10

申請者	看護師	廣澤 和也
課題名	認知症高齢者が落ち着いた入院生活ができるためのプランニングの1事例 ～暮らしに沿ったプランニングが認知症高齢者にもたらす効果～	
研究の概要	<p>当病棟に入院している患者は、認知症の周辺症状の悪化により、自宅や施設での療養が困難となった患者であるため、周辺症状への治療・看護が中心となり、患者の生活史、患者・家族のニーズに焦点を当てた関わりが不足している部分があった。現在、認知症疾患についての文献や先行研究では、認知症がその人の「全て」ではなく、あくまで「その人の一部」であり、暮らし重視のケアが大切であると言われている。そこで、当病棟に入院している患者とその家族の生活史・ニーズを把握し、認知症ケアのプランニングを実践する必要があると考えた。そこで、看護の質の向上を図るために、プランニングの効果について明らかにすることとしたい。</p>	
判定	承認	

受付番号25-11

申請者	看護師	小須田 映理菜
課題名	重症心身障害者病棟における職員の危険予知能力の変化 ～多職種にKYT実施前後の意識調査を実施して～	
研究の概要	<p>当重症心身障害者病棟では、看護師・療養介助員・保育士等の多職種が患者に関わっている。患者に、安全・安楽な療養環境を提供するために、多職種と情報を共有して危険を予知しチームで取り組んで行くことが必要である。情報提供の方法として、日常生活援助場面での注意事項を看護師から他職種に伝えているが、どの程度理解されているか不明である。一方的に情報を提供するのではなく、一緒に考えてKYTを実施することで、統一した視点で危険予防行動がとれると考える。また、多職種で日常生活援助場面のKYTを実施することで、更なる危険予知能力の向上や安全に対する意識が高まると考え意識調査を行う。</p>	
判定	承認	

受付番号25-12

申請者	看護師	笹澤 京子
課題名	ムーブメント活動を継続することによる有効性について ～患者の豊かな表情・緊張緩和を目指して～	
研究の概要	重症心身障害児(者)病棟では平成23年度に、ムーブメント活動の有効性について看護研究を行い、継続したムーブメント活動が患者の表情や緊張の緩和につながるのではないかと示唆された。そこで、継続したムーブメント活動(スキップ・リラックス体操・運動道具)を通して感覚・運動機能に働きかけを行い単調になりがちな重症心身障害児(者)の生活に変化を持たせ自発的な笑顔・笑い声などの快反応を引き出すことを目的に研究を行う。	
判定	承認	

受付番号25-13

申請者	看護師	鎌城 有香里
課題名	服薬中断プログラムに関わる看護師の意識調査 ーインタビューによる感情面の明確化ー	
研究の概要	当病棟では、薬物療法の必要性を対象者自身が感じられることを目的に、服薬を一時的に中止する服薬中断プログラムを実施している。これは、抗精神病薬の効果の自覚・服薬の必要性を理解することに繋がり、結果として薬物療法を対象者自身が納得し、服薬アドヒアランスが向上することを期待している。また、効果的な薬物療法は病状の安定や疾病理解、認知機能の向上、さらには良好な対人関係の構築にも結びつき、最終的に社会復帰へと近づくことが出来ると考える。しかし、服薬中断は病状の悪化やそれに伴う再他害行為、対象者のアドヒアランスを得ることが出来ない可能性がある。そのことは、日々関わる看護師の服薬中断プログラムに対する抵抗感や不安に繋がっていることも否めない。そこで、良好な対象者・看護師関係の構築、リスクアセスメントの精度の向上等の一助として、服薬中断プログラムの実践における看護師に半構造化個別インタビューを行い、期待や不安等の感情を明確化し分析を行う。	
判定	承認	